
蝉時雨

日暮ひかり

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

蝉時雨

【Nコード】

N8787D

【作者名】

日暮ひかり

【あらすじ】

太陽が降りそそぐ八月の空の下で、わたしは駐車場に立ちつくしていた。かなたには耳をつんざくような蝉時雨。真っ白な世界で、わたしは、あの懐かしい音を探した。

プロローグ（前書き）

もうひとつの連載の反動でやっちまいました。
ちよっと暗めのシリーズです。

蝉時雨

プロローグ

うだるような暑さが続いていた。

世界中が大きな鍋の中におさまっていて、ぐつぐつと音を立てて煮えたぎっているようだった。

四方から容赦ない熱が体を襲う。額に浮いた汗がたちまち球になり、頬から顎へと伝ってアスファルトに落ちると、数える間もなく消えてしまった。体は熱く火照り、脳みそまで沸騰している気がする。

すでに限界は超えているんだろうと、他人事のように思った。きつと心が真っ白なんだろう。

太陽が降りそそぐ八月の空の下で、わたしは駐車場に立ちつくしていた。

体が重いようで軽く、軽いようで重い。どちらにしてもただの入れ物と化しているようだった。記憶も、意識も感覚も、空っぽの体の中で宙に浮いて漂っていて、自分というものの中心が今どこにあるのかわからない。暑い。何だかすべてを投げ出してしまいたいようで、ゆっくりと瞳を閉じる。

瞼の裏に何色ともつかない光がちらついて、目の前まで真っ白につつまれていった。

蝉時雨

ああ、蝉時雨。うるさいぐらいに鳴いている。
撃ち殺してもいいだろうか

< ; - > ;

「嫌いなんだ、セミの死骸って」

「……はあ？」

さっきまでの会話からはまるで予想外のその言葉に、思わずおかしな顔をしてしまったのが自分でもよくわかった。

「いや、リツちゃんさあ。気持ち悪くない？」

例えば人前で堂々とイチヤつくカップルって気持ち悪くない？と聞くと同じような感じで、桜庭さくらばがこんな突拍子もないことを聞いてきたのは、一学期の期末テスト明けの下校途中のことだった。

わたしはそう聞かれて、ふと桜庭が視線を投げているほうを見る。なるほど。

植え込みの土からちよつとはみでた歩道の隅っこに、セミの死骸が転がっていた。

夏も本格的に始まりつつある今日、ますます威勢がよくなってきた太陽の日差しと、それに負けじと熱を吸い取り応戦する地面に挟まれて、ぴくりとも動かずにいる。

……うん、死んでいるな。

それを確認して顔を上げると、いかにも、いやなもん見た、という感じで眉間にしわを寄せている桜庭の顔が見えたのだった。

蝉時雨

「えーと……うん……っつか生き物の死体って、大体気持ち悪いんじゃない……？」

それにしたって突然すぎると思う。

というか、正直こんなこと聞かれても困ると思ってしまった。

こいつ可哀想とかそういうのなのかなー、とか思ったりもしつつ、どう答えていいのかわからなかったので、とりあえず訊かれたことに対してわたしの的にふつうの回答を返してみた。

ところが、そんなわたしの混乱なんかどこ吹く風という具合に、桜庭はいやそうじゃないね、という顔でかぶりをふって、

「セミは特別」

こつ断言する。

「……へー」

そんな桜庭に見せつけるように、わたしはわざと気のない返事をしてみせた。

まったく、こいつときたら……

たくさんの亮栄^{アキラ}高生^{タカウミ}に地獄を見せた期末テストもようやく明けて、これからいよいよ夏休みが始まるっていうのに。

これ以上なく晴れ晴れした気分は今なのに、たからかに笑い声を上げてぐるぐる回りながら路上を駆けていきたいような今なのに、こんな話題で盛り上がりたくない。

というより、これ以上盛り上げようのない話だし、早く終わりにしたかった。

何が悲しくて初夏の青い空の下、男女二人でセミの死体の話などしなければいけないのだろう。この花のテスト明けに！

わたしのせいっぱいの気のない返事はそれなりに効果があつたようで、桜庭がそれ以上言葉を続けることはなかった。

わたしはほつと胸を撫で下ろして、前を見た。

同じ服を着た高校生たちが、思い思いの会話を楽しみながら、思い思いのスピードで足を進めている。

みんな晴れやかだった。

歩道橋のかかる大通りをぎゅんぎゅんと走り去っていく車の滑走音にも負けない勢いを持ったわたしたちのうきうきとした気持ちは、ここちよく暑い空気に染み入って、通学路中を照らしていただろうと思う。

八百屋に並べられた大玉スイカが誇らしげに胸を張り、二階の窓辺に吊るされた風鈴が静かに風にゆられていた。

そんな光景を眺めていると、ほんのちよつとだけ下がったテンションもすぐに盛り返してくるのだから、夏という季節はすごい。

気分がよかった。

きれいじゃないのは分かりきっている東京都心の空気だけど、なんとなくそうしたくなってわたしは深く息を吸い込んだ。テストも悪くない、そう思いながら。

桜庭と目が合った。こんなところで深呼吸なんかしているバカを一目見ると、桜庭はおかしそうにふつと笑みを浮かべて前を向いた。そしてまた、二人分のしずけさが初夏の町並みへ静かに溶けていく。

もう何年間も会っていないなかったというのに、不思議と気まずさは感じなかった。

並んで歩いているだけで、どこか澄んだ空気のような、家族にも似た居心地のよさをくれる。

桜庭は、そういう奴。

< ; >

わたしと桜庭が出会ったのは小学生の頃だった。

わたし、新藤理津^{しんどうりつ}。あいつ、桜庭^{さくらにわ}尽。

最初のきっかけは、ただ入学して一番最初のクラスで出席番号が同じで、席が隣だったっただけ。

自然とよく喋るようになって、気がつけば、わたしは桜庭に夢中になっていた。

好きだった、ってわけじゃないし、今もそうだ。

桜庭は変な奴だ。

見ているところがわたしともみんなとも違っていたから、わたしはいつもなにを見てるの？ って聞いた。

桜庭の考えることが気になって、いつも追いかけていた。

桜庭は静かに、でも少し嬉しそうに、いろんなことを話してくれた。

空の雲がちぎれるのはきつと風の通り道をあけてあげているからだ、とか。

砂の粒が丸いのはできるだけどこか遠くへ転がっていききたいからだ、とか。

海の色が青いのはみんなの代わりに泣いているおかあさんだからだ、とか。

桜庭の話はいつも途方がなく広くて、遠くにある。

いま思えば全然現実感のない話ばかりだけど、夢はいっぱいだった。

蝉時雨

わたしの知らないことをたくさん教えてくれる物知りの……
博士、というほどお固くはない。

妖精さん、ってほどかわいげはない。

森のフクロウ。ちいさくて白いやつだ。そういうのが近い。かわいげはないけど、顔は可愛い。目がでかくて口が小さくて、肌はなまっ白くやせていた。

性格なんかははつきり言って、わたしなんかとは全然違う。

わたしは元気で、元氣すぎて、小学校時代なんかは結局一度も学校を休むことがなかった。

いつも外で走り回っているようなタイプ。よくジャングルジムからむちゃくちゃな飛び方で落っこちては青あざを作っていたし、写真を見返すと、今より全然よく日焼けしている。男勝りってやつだ。わたしのランドセルからはいつでも太陽のおいがした。

りっちゃんはおひさまの子みたいだね。

大好きだった若い女の先生に言われたその言葉を、いたく気に入っていた。

だから、雨の日はいつもしょんぼりしていた。

そんなときに、逆に元気になるのが桜庭だった。

<三>

桜庭は体が弱いほうで、よく風邪で休んだ。そんな日の給食は少しつまらなかつた。

休み時間になるとわたしが一緒に　今思えば無理やり　外に連れ出していたけど、何もしないでただ周りを見ていることがほとんどだ。当然、体育は見学が多い。

しかも女のわたしがよく一緒にいるせいで、よく「桜庭って本当は女なんだろう！」とか言ってくる奴がいた。実際そのころの桜庭はよく女の子に間違えられていた。

そんな奴はたいいてい、わたしが追いかけてまわしてひっぱたいやると大人しくなつた。

桜庭はいつもそれを見て「お前が本当は男子なんだよな」と笑っていた。

そんな桜庭が一番いきいきとしていたのが図工の時間だ。

わたしも図工は好きだつたけど、好きさでも、作るものの出来でも、桜庭にはぜんぜん敵つていなかった。

わたしのはただのばかげた工作だけど、桜庭のは『作品』だ。いつもうんうん悩んでいて、なかなか作業を進めようとしないう桜庭を、わたしは「遅い」と言つてバカにしていたけど、小さな大先生はそんなことぜんぜん気にしちやいない。

自分のペースでしつかり想像をめぐらせて、のんびり形にしていた。出来上がったものはどれも、先生からもみんなからもよく褒められていた。

そんな子だから、雨の日の休み時間は天国だったのにちがいない。太陽女のわたしにはとても想像がつかなくつたけれど。

いつも楽しそうに絵を描いていた。

わたしも最初はいつしよに描いていたけど、しだいに桜庭が絵を

描いているのを見ているほうが楽しくなってきた、最後はわたしはお客さん役に落ち着いた。

桜庭先生に絵の依頼をするお客さんだ。そう思っていると聞いたことは一度もなかったけど。

先生はなんでも描いてくれた。わたしが好きだった車の絵も、むかつく先生の変な似顔絵も、マンガやゲームの絵だっただ。

小学校四年生のとき、思い切って、好きな男の子の絵を描いてほしい、と言ったことがあった。

笑って「お前キモいよ」と言われたが、あとで誕生日にこっそりくれた。どんな絵だったかは秘密だ。

嬉しくて、恥ずかしいけど捨てられなくて、今でも大事にしまっている。

結局そいつには振られてしまったけど、それでも捨てられないものなのだ。

五年生に進級して、クラスが分かれてしまっただけから、わたしと桜庭の奇妙な関係は細々と続いた。

さすがにもうその頃になると、いくら周りから無神経といわれがちなたしといえども、堂々と桜庭につきまとうことはできなくなっていたけれど、それでも桜庭に対するわたしの興味は尽きることはなかった。

クラス替えて組が分かれてしまった女の子の友達に会いに来る、そのついでに 今考えればむしろ、その「ついで」のほうがわたしには大事だったのかもしれない。わたしは必ず桜庭にちょっかいをかけていった。

桜庭は相変わらずおとなしくて、大体いつも席に座って前の時間を出された宿題を片付けるなり、読者週間でもないのに図書室で借りてきた本を読むなり、なんなりしていた。

そんな桜庭にわたしは、何か描いてよ、といつもせがんだのだけれど、恥ずかしいからいやだよ、と言っていつも断られた。

その頃の桜庭から半ば強引に聞き出した情報によると、いよいよ本格的に絵の描き方だとかを絵画教室で習いだしていたらしく、わたしはなおのこと、桜庭の絵が見たくて見たくて仕方なくなっていた。

元々うまいものももつとうまくなったら一体どうなるのか、生きているなら気になるのは当然だ、というのがわたしの言い分だ。

けれど桜庭は折れなかった。上手いのに、どうして見せたがらないのか、わたしがいくら理解できずに「いじわる」と言っても、まったく意にかいさずで。

さみしかった。

理由はそれだけじゃない。桜庭は明らかに、わたしに対してそっけなくなっていた。

小学生の、それも本もろくに読まず、けして成績のいいほうとは言えなかったわたしに「そっけない」なんて言葉が果たしてわかったのかどうかは忘れてしまったけれど、今考えればそれがしっくりきた。

話すときも大抵、視線は下にあるノートなり本なりを向いていたし、自分から話しかけてくるようなことはあまり、いや、ほとんどなかったと思う。

桜庭はそっけなくなった。夏から秋へと流れる空気のように、自然でひやかかな速度で、そっと。

桜庭と話している時間は、相変わらず楽しかった。けれど、何かやっぱり少しさみしくて、わたしは桜庭と仲良しな学級机をうらめしく思った。

それから自然と隣の組に向かう足も遠のいていった、六年生のあの日のことだった。

桜庭が学校に来なくなったと聞いた。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8787d/>

蝉時雨

2009年6月23日00時36分発行